

日本美術史におけるモチーフとしての埴輪展



～ 踊る埴輪と埴輪 短甲の武人を中心として ～

会期：令和7年7月1日（火）～ 令和7年9月15日（月・祝）

会場：熊谷市指定記念物・名勝「星溪園」積翠閣ギャラリー

1 はじめに

日本の近現代において、芸術作品のモチーフとして埴輪が使用される例が多数見られます。埴輪は、日本人の琴線に触れるものであると推量され、ましてや芸術家は、^{いにしえ}古の人が作った優れた芸術作品とも言える埴輪の造形にシンパシーを感じ、そして大いに魅了され、作品制作の意欲を掻き立てられ、その表現として作品にして生み出してきたのではないのでしょうか。

ところで、埴輪、特に形象埴輪は、古墳時代の有力者の墳墓である古墳に樹立され、古墳に埋葬された有力者である被葬者の代替わり（政権交代）の際の継承の様子を表す、葬送儀式の様子を表す、そして、被葬者の生前の功績を顕彰するといった意味があると考えられているものです。その一つ一つには個性があり、造形として優れたものがあり、当時の埴輪工人の技術力が優れていたことが、今に残された埴輪によりありありと分かります。

さて、作品のモチーフとした埴輪には、熊谷市で唯一出土した「踊る埴輪」や、国重要文化財に指定されている「埴輪 短甲の武人」が見られます。

「踊る埴輪」は、一般的には、この名称で全国の多く人が知っており、目と口を大きく開けた愛嬌のあるおどけた表情は、多くの人々を魅了し、とても親しみが感じられます。一方、「埴輪 短甲の武人」は、端正な顔立ちをし、気品があり、また、全体のバランスが良くプロポーションも理想的であり、丁寧に仕上げられた完全武装姿から、全国の武人埴輪にあって、他に例を見ない秀逸の一品と言えます。

この度は、令和7年度新規事業の「踊る埴輪」知名度アップ事業とタイアップして、江南文化財センターが所有する9名の芸術家（画家等）による作品を紹介する展示です。

本展示を通して、埴輪のもつ造形の芸術性について、埴輪の歴史的な経緯と合わせて理解が深まれば幸いです。

2 「踊る埴輪（埴輪 踊る人々）」について

- (1) 出土地 埼玉県熊谷市野原・野原古墳出土
- (2) 法 量 背の高い人物 高さ 64cm 幅 17cm
背の低い人物 高さ 61.5cm 幅 14cm

- (3) 時 代 古墳時代後期・6世紀後半
- (4) 所有者 東京国立博物館
- (5) 概 要 「踊る埴輪」は、昭和5年（1930）、大里郡小原村（現在の熊谷市野原）の前方後円墳・野原古墳から、畑の開墾中に発見されました。その後の昭和7年（1932）、東京帝室博物館（現在の東京国立博物館）が購入・所蔵し、現在に至っています。



眼と口を丸く開け、一筋の粘土紐を貼り付けて鼻とし、顔を表現しています。全身は大胆な省略法で素朴に表現されており、いかにもおどけた表情は、とても親しみが感じられます。

また、左手を挙げ、いかにも踊っているように見えることから、昭和6年（1931）、東京帝室博物館の後藤守一は、「踊る男女像」と名付けました。その後、「踊る人々」と名付け直し、これが現在の正式名称です。

背の高い人物は、顔の左右に小孔をあけて耳を表現しています。

一方、背の低い人物は、頭頂部に振分け髪又は帽子（^{こうがいぼう} 筭帽）、側頭部に上げ^{みす}美豆良の髪型が表現されており、腰には帯、そこから紐が下がり、後腰には曲刃鎌を提げています。

この背の低い人物は、髪型から明らかに男性を表現しており、また、近年の考古学的研究では、挙げた腕は、手綱^{たづな}をとって馬をひいている姿を表現しているとし、「馬子^{まこ}」であるとの説が有力視されています。もし、馬子とすれば、腰の鎌は、馬の飼葉^{かいば}を刈る、又は馬の蹄^{ひづめ}を削蹄^{さくてい}するためのものと思われます。

この埴輪は、全国的に有名で、誰もが知り、また全国の埴輪を代表する優品ですが、唯一熊谷市出土のものです。愛嬌のある姿は、数々のグッズにキャラクターとして採用され親しまれています。

3 国重要文化財「埴輪 短甲の武人（埴輪 武装男子像）」について

- (1) 出土地 埼玉県熊谷市上中条・鹿那祇東古墳出土
- (2) 法 量 現存高 64cm
- (3) 時 代 古墳時代後期・6世紀前半
- (4) 所有者 東京国立博物館
- (5) 指 定 昭和33年（1958）
- (6) 概 要 「埴輪 短甲の武人」は、明治9年（1876）、村（現在の熊谷市上中条）で耕作中に発見され、こ



こには鹿那祇東古墳^{か な ぎ ひがし}があり、この古墳からの出土と考えられています。その後、好古家で知られる大里郡青山村（現在の熊谷市青山）の根岸武香^{たけ か}の所有となり保管されていました。そして、全国に紹介され、多くの考古学者の注目を集め、様々な図譜や論文に用いられました。明治32年（1899）には歴史上の重要品に指定され、また明治33年（1900）にはフランス・パリで開催された「パリ博覧会」においても紹介されています。その後は、東京帝室博物館に所蔵され、太平洋戦争の際には戦火を逃れるため再び根岸家に疎開しています。

昭和33年（1958）に国の重要文化財に指定され、昭和36年（1961）には、再び東京国立博物館の所蔵となり、現在に至っています。

頭部と体部がバランス良く造形され、輪郭の整った顔は、表面が滑らかに仕上げられています。

目は杏仁形^{あん に ん が た}の切れ長、自然な配置の眉、鼻筋が美しく通り、やや小ぶりで紡錘形^{ぼう す い けい}の口もバランスの良く配置されています。僅かに赤彩が残っており、彩色が施された痕跡が見て取れます。

頭部には衝角付冑^{しょうかくつきかぶと}を被っていますが、鋤^{かぶ}は欠損しています。側頭部には、下げ美豆良の髪型が表現されていたものと思われます。首には、丸玉で構成される首飾りを着けています。

体部には、鋇留^{びょうどめ}の帯金式短甲^{たんこう}（横矧板鋇留短甲^{よこはぎいたびょうどめ}）を着用し、左腰に大刀^{たち は}を佩きます。両腕を欠失していますが、恐らく、右腕は、左腰の大刀の柄頭^{つかがしら}に手をかけているポーズをとっていたと推定されます。

この埴輪は、忠実に再現された武具を装備した完全武装姿で、丁寧に仕上げられており、日本の初期美術作品として、また人物埴輪の代表例として、美術、歴史双方で高い評価を得てきました。

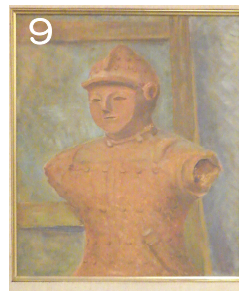
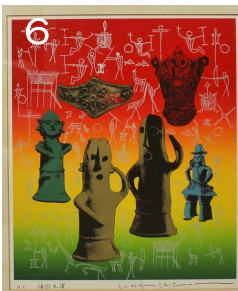
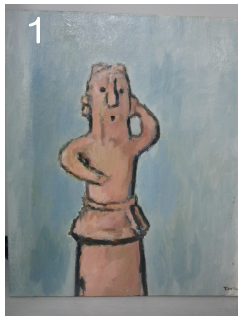
4 展示作品について

(1) 「踊る埴輪（埴輪 踊る人々）」のモチーフ作品

	題 名	作 者	種 別	サイズ	備 考
1	埴 輪	臼田 輝四郎	油彩画	F10号 530×455 mm	昭和44年 (1969) 作
2	双埴輪画	山下 芳広	油彩画	310×410 mm	
3	埴 輪	馬淵 聖	版 画	420×297 mm	
4	埴 輪	下澤 木鉢郎	水彩画	272×170 mm	
5	埴 輪	のむら 清六	墨 絵	120×315 mm	
6	倭国礼賛	木村 光佑	リトグ ラフ	420×360 mm	埴輪のほか縄文土器、金製指輪。背景に、銅鐸に描かれた人物・動物等図像を配置。

(2) 「埴輪 短甲の武人（埴輪 武装男子像）」モチーフ作品

	題 名	作 者	種 別	サイズ	備 考
7	短甲武人埴輪	小貫 博堂	レリーフ	290×200 mm	
8	短甲武装の男子像	松木 重雄	油彩画	F8号 455×380 mm	昭和35年 (1960) 作
9	短甲武人埴輪	今成 安行	油彩画	F10号 530×455 mm	昭和50年 (1975) 頃作



5 展示作品の作家について

(1) 臼田 輝四郎（うすだ てるしろう）

- ・生年、没年 大正4年（1915）－平成16年（2004）
- ・略歴 長野県佐久市生まれ。

昭和10年(1935)、東京美術学校（現在の東京藝術大学）油絵科予科に入学し、^{ふじしま たけし}藤島武二に学ぶ。昭和15年（1940）、東京美術学校油絵科本科を卒業する。

昭和17年(1942)に第5回文部省美術展覧会出品、日展・国展等いくつかの会に出品する。昭和47年(1972)に、サエグサ画廊で個展を開催する。

^{ありしま いくま}有島生馬（^{たけお}有島武郎の弟、^{さとみ とん}里美 弐の兄）とも交流があった。

(2) 山下 芳広（やました よしひろ）

- ・生年、没年 昭和6年（1931）－平成21年（2009）
- ・略歴 香川県生まれ。

故山下陽山に師事し、陽山没後は、人間国宝・^{いそいじょしん}磯井如真に師事する。

香川県美術展において連続入選のほか、関西美術展及び日本伝統工芸展において入選、香川県美術展教育委員会賞を2回、香川県美術展佳作賞、日本工芸会四国支部長賞、日本工芸会四国支部奨励賞を2回、それぞれ受賞する。

日本工芸会正会員。

(3) 馬淵 聖（まぶち とおる）

・生年、没年 大正9年（1920）－平成6年（1994）

・略歴 東京都生まれ。

木口木版彫師・作家であった父・馬淵録太郎の影響を受け、幼少の頃から色摺り木版を得意とし、東京美術学校（現在の東京藝術大学）では工芸科図案部に在籍しながら、臨時版画教室の木版画部で平塚運一に学ぶ。在学中、光風会展に初入選、卒業制作「木版による自然物の装飾的表現」は文部省買上げとなる。

父の経営するデザイン会社に勤める傍ら、日展、光風会、日本版画協会を舞台に発表を続け、昭和35年（1960）には棟方志功、前川千帆らと日本版画会の創設に参加、後に同会会長に推され、74歳で没するまで務める。

昭和25年（1950）代半ばからの埴輪シリーズや昭和37年（1962）からの卓上静物シリーズが知られ、「モザイク効果」と呼ばれる独自の技法で、従来の版画には見られない重厚な作風を確立した。

(4) 下澤 木鉢郎（しもさわ きはちろう）

・生年、没年 明治34年（1901）－昭和61年（1986）

・経歴 青森県弘前市生まれ。もとは下山姓。本名は喜八郎。

大正15年（1916）、上京して本屋に勤めるが、作家・宇野浩二に広告画の才能を認められ、昭和3年（1928）、国画会が発足すると同展に出品するようになる。翌年、国画会版画部の設立に伴い版画を始める。

昭和6年（1931）、第6回国画会展にテンペラ画「晩夏の深裏」などを出品し、国画会奨励賞を受賞する。昭和8年（1933）、第8回国画会展に「昆布干す浜辺」「冬の八甲田」などを出品し、国画会奨励賞を再度受賞する。昭和15年（1940）、第15回国画会展に「脩君像」を出品し褒状を受け、昭和18年（1943）に国画会会員となる。

昭和27年（1943）、棟方志功らと日本版画院を創立する。

写実的な木版による風景画を得意とし、著書に『版画の技法』等がある。

(5) のむら 清六（のむら せいろく）

- ・生年、没年 大正5年（1916）－平成7年（1995）
- ・経歴 山梨県下九一色村（現在の三珠町）生まれ。

川端画学校に入り日本画を学ぶ。初め、新興美術院に出品し、昭和33年（1958）に岩崎巴人、長崎莫人らとともに日本表現派を結成する。油彩画のように剛毅な筆致と重厚な画面の水墨着彩画によって、戦後の日本画改革運動の一端を担った。

昭和36年（1961）に無所属となつてからは、精力的に個展を重ね、昭和50年（1975）、第1回日仏現代美術展において、「白猫図」が大賞を受賞する。

(6) 木村 光佑（きむら こうすけ）

- ・生年 昭和11年（1936）－
- ・経歴 大阪市生まれ。

昭和34年（1959）、京都市立美術大学（現在の京都市立芸術大学）日本画科を卒業する。30歳を過ぎた作家デビューと同時に、昭和43年（1968）に現代日本美術展で入選、昭和45年（1970）にはイギリス国際版画ビエンナーレでメモリアル賞を受賞、翌年には、ジャパンアートフェスティバルで大賞、リュブリアナ国際版画ビエンナーレで国際大賞、昭和48年（1973）に世界版画コンクールで国際大賞など、立て続けに受賞を重ねる。昭和52年（1977）に現代国際彫刻展で大賞、昭和62年（1987）に「現代の版画1987」で大賞を受賞する。

昭和62年（1987）、京都工芸繊維大学工芸学部教授に就任し、現在、京都工芸繊維大学名誉教授を務める。

平成4年（1992）に国際芸術文化賞及び大阪市文化功労賞、平成6年（1994）に京都府文化賞・功労賞、平成8年（1996）に京都美術文化賞を受賞する。

平成8年（1996）に紺綬褒章、平成11年（1999）に紫綬褒章を叙勲される。

作品は、淡色層を重ねる日本画式色彩法を用い、リトグラフとシルクスクリーンを併用して、鮮やかな色彩のグラデーションで画面を構成する特徴をもつ。

(7) 小貫 博堂（おぬき はくどう）

- ・生年、没年 明治12年（1879）－昭和35年（1960）
- ・経歴 東京都（浅草）生まれ。教育者。

明治29年（1896）に東京美術学校（現在の東京藝術大学）日

本画科に入学、明治 35 年（1902）に最優秀で卒業し、同校研究科に進む。在学中から日本画改革のため新派活動を起こす。

明治 40 年（1907）、福島県立会津中学校から山形県立荘内中学校（現在の鶴岡南高等学校）兼西田川郡立荘内染織学校（現在の鶴岡工業高等学校）の教諭（美術）に着任し、昭和 12 年（1937）まで勤める。この間、中央画壇の作品を精力的に紹介し、生徒の作品も展示して美術意識を高め、数多くの生徒を東京美術学校に進学させる。

教師退職後は、太春院^{たいしゅんいん}という寺院を借りて「図画研究」の私塾を開く。以降、生徒の図画指導に専念し、中央画壇には出品しなかったが、大正 10 年（1921）には、日本研美会主催日本画家推薦会から特別格推薦、大正 13 年（1924）には、日本研美会日本名画推薦会から名誉大賞盃を授与される。

また、児童絵画教育の普及のために絵画展を定着させ、昭和 9 年（1934）に自費で小貫芸術賞を創設する。

人格高潔で気品があり、容姿端麗、物静かで温和、趣味豊かな粹人であり、柔道、琴、尺八、謡曲は免状を得て、考古学の土器・石器^{しゅうしゅう}の蒐集研究もした。

(8) 松木 重雄（まつき しげお）

- ・生年、没年 大正 6 年（1917）－平成 22 年（2010）
- ・経歴 長野県信濃町生まれ。

東京文理科大学（現在の筑波大学）卒業。昭和 24 年（1949）に示現会^{しげんかい}展へ出品、翌年には、示現会会員に推挙され、また日展に初入選する。昭和 32 年（1957）に「シシリーの町」で日展特選、昭和 43 年（1968）には「アンデスの古城」が菊花賞を受賞する。

任文部教官、東京高等師範学校助教授、東京教育大学教授を歴任し、昭和 49 年（1974）に筑波大学教授となる。その後、筑波大学芸術学群長などを歴任し、昭和 56 年（1981）に退官、筑波大学名誉教授を務める。

昭和 51 年（1976）に日展会員、平成 6 年（1994）には日展評議員となり、その後、日展参与を務める。平成 16 年（2004）には、示現会会長となる。

平成 2 年（1990）、勲二等瑞宝章^{くんととうすいほうしょう}を叙勲^{じょくん}される。

(9) 今成 安行（いまなり やすゆき）

- ・生年、没年 昭和 14 年（1939）－平成 26 年（2014）
- ・経歴 東京都生まれ。

昭和 50 年（1975）頃から自動車板金塗装業の傍ら、埼玉県羽

生市の白石絵画教室で絵画を学び、県展や県北美術展に作品を出品する。今回展示の作品は、氏の初期の作品である。

昭和 51 年（1976）、第 26 回県展に「まどのある静物」出品、昭和 50 年（1975）、第 18 回県北美術展に「卓上のびん」、昭和 51 年（1976）、第 19 回県北美術展に「卓上の静物」、昭和 54 年（1979）、第 22 回県北美術展に「キューピット」を出品する。

6 おわりに

この度は、市内野原・野原古墳から出土した「踊る埴輪」及び市内上中条・鹿那祇東古墳から出土した国重要文化財「埴輪 短甲の武人」をモチーフにした、近現代の作家による美術作品を展示しました。

モチーフとなっただけの埴輪も、熊谷市の埴輪を代表するものであり、全国的に見ても埴輪の代表格としての威厳を保つ優れた作品です。それは、造形的に優れた芸術性をもち、また歴史的にも価値のあるものであり、誰もが一目見れば、その芸術的・歴史的優位性を明らかに認識できるものです。だからこそ、芸術家にとって、心を強く揺さぶるものであったのでしょう。

このことは、参考としてパネル展示した、令和5年度の熊谷市立江南文化財センター開館 15 周年事業「小学生が描く熊谷の古代」絵画コンクール作品にも表れていると思います。このコンクールの題材は「熊谷の古代」でしたが、当時多数応募のあった作品を描いてくれた小学生たちも、その多くが「踊る埴輪」であり、国重要文化財「埴輪 短甲の武人」や「埴輪 馬」をモチーフにした作品を制作しています。これは、近現代の美術家にも現在の子供たちにも、共通して感じるものがあるからではないでしょうか。

さて、令和6～7年度、発見当初の復元修理以来の本格的解体修理を経た「踊る埴輪」が、東京国立博物館を皮切りに、遠くは九州国立博物館でも開催された特別展「はにわ」において、企画展の大切な役割を担うプロローグの埴輪として初お披露目されました。この企画展は、約120件に上る選りすぐりの至宝とも言える全国各地の埴輪の優品を一堂に会した正に空前絶後のものであり、多くの方が鑑賞に訪れ、盛況を博しました。

このように、埴輪は、これからも重要な歴史資料として、また優れた美術作品として、日本人を魅了し続けるでしょう。

私たち熊谷市は、「踊る埴輪」という唯一熊谷市で出土した埴輪、そして、同じく熊谷市で出土した国を代表する埴輪との評価がなされている重要文化財「埴輪 短甲の武人」及び「埴輪 馬」を、熊谷市の誇りとして、未来永劫語り継いでいこうと思います。

令和7年7月1日発行

編集・発行：熊谷市教育委員会 社会教育課 文化財保護係（熊谷市立江南文化財センター）